

冬

芥川龍之介

青空文庫

僕は重い外がいとう套とうにアストラカンの帽をかぶり、市いちヶ谷やの刑務所へ歩いて行つた。僕の従兄いとこは四五日前にその刑務所にはいつていた。僕は従兄を慰める親戚総代にほかならなかつた。が、僕の気もちの中には刑務所に対する好奇心もまじっていることは確かだつた。

二月に近い往来は売出しの旗などの残つていたものの、どこの町全体も冬枯れていた。僕は坂を登りながら、僕自身も肉体的にしみじみ疲れていることを感じた。僕の叔父おじは去年の十一月に喉ご頭うとう癌がんのために故人になつていた。それから僕の遠縁の少年はこの正月に家出していた。それから——しかし従兄の収しゅう監かんは僕

には何よりも打撃だった。僕は従兄の弟と一しよに最も僕には縁の遠い交渉を重ねなければならなかった。のみならずそれ等の事件にからまる親戚同志の感情上の問題は東京に生まれた人々以外に通じ悪い^{にく}こだわりを生じ勝ちだった。僕は従兄と面会した上、ともかくどこかに一週間でも静養したいと思わずにはいられなかった。……

市ヶ谷の刑務所は草の枯れた、高い土手^{どて}をめぐらしていた。のみならずどこか中世紀じみた門には太い木の格子戸^{こうしど}の向うに、霜に焦げた檜^{ひのき}などのある、砂利^{じやり}を敷いた庭を透^すかしていた。僕はこの門の前に立ち、長い半白^{はんぱく}の髭^{ひげ}を垂^たらした、好人物らしい看^{かんし}守^ゆに名刺を渡した。それから余り門と離れていない、庇^{ひさし}に厚い

苔こけの乾いた面会人控室へつれて行って貰った。そこにはもう僕のほかにも薄縁うすべりを張った腰かけの上に何人も腰をおろしていた。しかし一番目立ったのは黒縮緬くろちりめんの羽織をひっかけ、何か雑誌を読んでいる三十四五の女だった。

妙ぶあいそうに無愛想な一人の看守は時々こう云う控室へ来、少しも抑よ揚くようのない声にちようど面会の順に当った人々の番号を呼び上げて行った。が、僕はいつまで待っても、容易に番号を呼ばれなかった。いつまで待っても——僕の刑務所の門をくぐったのはかれこれ十時になりかかっていた。けれども僕の腕時計はもう一時十分前だった。

僕は勿もちろん論腹も減りはじめた。しかしそれよりもやり切れなか

つたのは全然火の氣けと云うもののない控室の中の寒さだった。僕は絶えず足踏みをしながら、苛いら々する心もちを抑おさえていた。が、大勢おおぜいの面会人は誰も存外ぞんがい平気らしかった。殊ととに丹前たんぜんを二枚重ねた、博奕ぼくち打ちらしい男などは新聞一つ読もうともせず、ゆつくり蜜柑みかんばかり食いつづけていた。

しかし大勢の面会人も看守の呼び出しに来る度にだんだん数を減らして行つた。僕はとうとう控室の前へ出、砂利を敷いた庭を歩きはじめた。そこには冬らしい日の光も当っているのに違ちがいなかつた。けれどもいつか立ち出した風も僕の顔へ薄うすい塵ちりを吹きつけて来るのに違ちがいなかつた。僕は自然と依怙えこじ地になり、とにかく四時になるまでは控室へはいるまいと決心した。

僕は生憎あいにく四時になつても、まだ呼び出して貰われなかつた。

のみならず僕より後あとに来た人々もいつか呼び出しに遇あつたと見え、大抵たいていはもういなくなつていた。僕はとうとう控室へはいり、博奕打ちらしい男にお時宜じぎをした上、僕の場合を相談した。が、彼はにこりともせず、浪花節語ななわぶしかたりに近い声にこう云う返事をしただけだつた。

「一いち日にちに一人ひとりしか会わせませんからね。お前まえさんの前に誰か会つているんでしよう。」

勿論こう云う彼の言葉は僕を不安にしたのに違ちがひなかつた。僕はまた番号を呼びに来た看守に一体いっ徒兄とこに面会することは出来るかどうか尋ねることにした。しかし看守は僕の言葉に全然返事を

しなかつた上、僕の顔も見ずに歩いて行ってしまった。同時にまた博奕打ちらしい男も二三人の面会人と一しよに看守のあとについて行ってしまった。僕は土間のまどま中に立ち、機械的に巻煙草に火をつけたりした。が、時間の移るにつれ、だんだん無愛想ぶあいそうな看守に対する憎しみの深まるのを感じ出した。(僕はこの侮ぶじよ辱くを受けた時に急に不快にならないことをいつも不思議に思っている。)

看守のもう一度呼び出しに来たのはかれこれ五時になりかかっていた。僕はまたアストラカンの帽をとった上、看守に同じことを問いかけようとした。すると看守は横を向いたまま、僕の言葉を聞かないうちにさっさと向うへ行行ってしまった。「余りと言え

ば余り」とは實際こう云う瞬間の僕の感情に違いなかつた。僕は巻煙草の吸いさしを投げつけ、控室の向うにある刑務所の玄関げんかんへ歩いて行つた。

玄関の石段を登つた左には和服を着た人も何人か硝子窓ガラスの向うに事務を執とつていた。僕はその硝子窓をあけ、黒い紬つむぎの紋つきを着た男に出来るだけ静かに話しかけた。が、顔色かおいろの変つてゐることは僕自身はつきり意識してゐた。

「僕はTの面会人です。Tには面会は出来ないんですか？」

「番号を呼びに来るのを待つて下さい。」

「僕は十時頃から待つています。」

「そのうちに呼びに来るでしょう。」

「呼びに来なければ待つているんですか？　日が暮れても待つているんですか？」

「まあ、とにかく待つて下さい。とにかく待つた上にして下さい。」

相手は僕のあばれでもするのを心配しているらしかった。僕は腹の立っている中にもちよつとこの男に同情した。「こつちは親戚総代になっていれば、向うは刑務所総代になっている、——そんな可笑おかしさも感じないのではなかった。

「もう五時過ぎになっています。面会だけは出来るように取り計はからつて下さい。」

僕はこう言い捨てたなり、ひとまず控室へ帰ることにした。も

う暮れかかった控室の中にはあの丸鬚まるまげの女が一人、今度は雑誌を膝の上に伏せ、ちゃんと顔を起していた。まともに見た彼女の顔はどこかゴシツクの彫刻らしかった。僕はこの女の前に坐り、未だいまに刑務所全体に対する弱者の反感を感じていた。

僕のやつと呼び出されたのはかれこれ六時になりかかっていた。僕は今度は目のくりくりした、機敏らしい看守かんしゅに案内され、やっと面会室の中にはいることになった。面会室は室と云うものの、精々せいせい二三尺四方ぐらいだった。のみならず僕のはいったほかにもペンキ塗りの戸の幾つも並んでいるのは共同便所にそっくりだった。面会室の正面にこれも狭い廊下ろうか越しに半月形はんげつがたの窓が一つあり、面会人はこの窓の向うに顔を顕あらわす仕組みになっていた。

従兄いとこはこの窓の向うに、——光の乏しい硝子窓ガラスの向うに円まると肥ふとった顔を出した。しかし存外ぞんがい変つていないことは幾分か僕を力丈夫にした。僕等は感傷主義を交まじえずに手短かに用事を話し合つた。が、僕の右隣りには兄に会いに来たらしい十六七の女が一人とめどなしに泣き声を洩もらしていた。僕は従兄と話しながら、この右隣りの泣き声に氣をとめない訣わけには行ゆかなかつた。

「今度のことは全然冤罪えんざいですから、どうか皆さんにそう言つて下さい。」

従兄は切きり口上こうじょうにこう言つたりした。僕は従兄を見つめたまま、この言葉には何なんとも答えなかつた。しかし何とも答えなかつたことはそれ自身僕に息苦しさを与えない訣わけには行ゆかなかつた。

現に僕の左隣りには斑まだらに頭の禿はげた老人が一人やはり半月形はんげつがたの窓越しに息子むすこらしい男にこう言っていた。

「会わずにひとりでいる時にはいろいろのことを思い出すのだが、どうも会うとなると忘れてしまつてな。」

僕は面会室の外へ出た時、何か従兄にすまなかつたように感じた。が、それは僕等同志の連帯責任であるようにも感じた。僕はまた看守に案内され、寒さの身にしみる刑務所の廊下を大股に玄関へ歩いて行つた。

ある山やまの手の従兄の家には僕の血を分けた従姉いとこが一人僕を待ち暮らしているはずだった。僕はごみごみした町の中をやつと四谷よつや見附みつけの停留所へ出、満員の電車に乗ることにした。「会わずにひ

とりいる時には」と言った、妙に力のない老人の言葉は未だに僕の耳に残っていた。それは女の泣き声よりも一層僕には人間的だった。僕は吊り革につかまっていたまま、夕明りの中に電燈をともした。麴こうじまち町の家々を眺め、今更のように「人さまさま」と云う言葉を思い出さずにはいられなかった。

三十分ばかりたつた後のち、僕は従兄の家の前に立ち、コンクリートの壁についたベルの鈕ボタンへ指をやっていた。かすかに伝わって来るベルの音は玄関の硝子戸ガラスの中に電燈をともした。それから年をとつた女中が一人細目に硝子戸をあけて見た後のち、「おや……」何なんとか間投詞かんとうしを洩らし、すぐに僕を往来に向つた二階の部屋へ案内した。僕はそのテエブルの上へ外套がいてうや帽子を投げ出した時、

一時に今まで忘れていた疲れを感じずにはいられなかった。女中ガスだんろは瓦斯暖炉に火をともし、僕一人を部屋の中に残して行つた。多少の蒐集癖を持つていた従兄はこの部屋の壁にも二三枚の油画あぶらえや水彩画すいさいがをかかげていた。僕はぼんやりそれらの画を見比べ、今更のように有為ういてんべん轉變などと云う昔の言葉を思い出していた。

そこへ前後してはいつて来たのは従姉や従兄の弟だった。従姉も僕の予期したよりもずっと落ち着いているらしかった。僕は出来るだけ正確に彼等に従兄の伝言を話し、今度の処置を相談し出した。従姉は格別積極的にどうしようかと云う気も持ち合せなかつた。のみならず話の相間あいまにもアストラカンの帽をとり上げ、こんなことを僕に話しかけたりした。

「妙な帽子ね。日本で出来るもんじやないでしょう？」

「これ？ これはロシア人のかぶる帽子さ。」

しかし従兄の弟は従兄以上に「仕事師」だけにいろいろの障害を見越していた。

「何しろこの間も兄貴あにきの友だちなどは××新聞の社会部の記者に

名刺を持たせてよこすんです。その名刺には口止め料金のうち半は

金んきんは自腹を切つて置いたから、残金を渡してくれと書いてある

んです。それもこつちで検しらべて見れば、その新聞記者に話したの

は兄貴の友だち自身なんですからね。勿論半金などを渡したんじゃない。ただ残金をとらせによこしているんです。そのまた新聞

記者も新聞記者ですし、……」

「僕もとにかく新聞記者ですよ。耳の痛いことは御免蒙りますかね。」

僕は僕自身を引き立てるためにも常談じょうだんを言わずにはいられなかった。が、従兄の弟は酒気を帯びた目を血走らせたまま、演説でもしているように話しつづけた。それは実際常談さえうっかり言われない権幕けんまくに違いなかった。

「おまけに予審判事よしんはんじを怒らせるためにわざと判事をつかまえては兄貴を弁護する手合いもあるんですからね。」

「それはあなたからでも話して頂けば、……」

「いや、勿論そう言っているんです。御厚意じゆうじゆうは重々じゆうじゆう感謝かえしますけれども、判事の感情を害すると、反かえつて御厚意そむに背そむきますか

らと頭を下げて頼んでゐるんです。」

従姉いとこは瓦斯ガス暖炉の前に坐つたまま、アストラカンの帽をおもちやにしていた。僕は正直に白状すれば、従兄の弟と話しながら、この帽のことばかり気にしていた。火の中にでも落されてはたまらない。——そんなことも時々考えていた。この帽は僕の友だちのベルリンのユダヤ人町を探がした上、偶然モスクヴァへ足を伸ばした時、やっと手に入れることの出来たものだった。

「そう言つても駄目だめですかね？」

「駄目どころじゃありません。僕は君たちのために思つて骨を折つていてやるのに失敬なことを言うなど来るんですから。」

「なるほどそれじゃどうすることも出来ない。」

「どうすることも出来ません。法律上の問題には勿論、道德上の問題にもならないんですからね。とにかく外見は友人のために時間や手数てすうをつぶしている、しかし事實は友人のために陥おとし穿あなを掘る手伝いをしている、——あたしもずいぶん奮闘主義ですが、ああ云うやつにかかつては手も足も出すことは出来ません。」

こう云う僕等の話の中に俄うちかに僕等を驚かしたのは「T君万歳」と云う声だった。僕は片手に窓かけを挙げ、窓越しに往来へ目を落した。狭い往来には人々が大勢おおぜい道幅一ぱいに集っていた。のみならず××町青年団と書いた提ちようちん灯が幾つも動いていた。僕は従姉たちと顔を見合せ、ふと従兄には××青年団団長と云う肩書もあつたのを思い出した。

「お礼を言いに出なくっちゃいけないでしょうね。」

従姉はやつと「たまらない」と云う顔をし、僕等二人ふたりを見比べるようにした。

「何、わたしが行って来ます。」

従兄の弟は無造作むぞうさにさつきと部屋を後ろにして行った。僕は彼の奮闘主義にある羨しうらやまさを感じながら、従姉の顔を見ないよう壁の上の画などを眺めたりした。しかし何も言わずにいることはそれ自身僕には苦しかった。と云って何か言つたために二人とも感傷的になつてしまうことはなおさら僕には苦しかった。僕は黙つて巻煙草に火をつけ、壁にかかげた画の一枚に、——従兄自身の肖像画に遠近法の狂いなどを見つけていた。

「こっちは万歳どころじゃありません。そんなことを言ったら仕かたはないけれども……」

従姉は妙に空ぞらしい声にとうとう僕に話しかけた。

「町内^{ちやうない}ではまだ知らずにいるのかしら？」

「ええ、……でも一体どうしたんでしょう？」

「何が？」

「Tのことよ。お父さんのこと。」

「それはTさんの身になって見れば、いろいろ事情もあつたらうしき。」

「そうでしようか？」

僕はいつか苛立たしきを感じ、従姉に後ろを向けたまま、窓の

前へ歩いて行つた。窓の下の人々は不相変あいかわらず万歳の声を挙げていた。それはまた「万歳、万歳」と三度繰り返して唱となえるものだった。従兄の弟は玄関の前へ出、手ん手に提ちようちん灯をさし上げた大勢おぜいの人々にお時宜じぎをしていた。のみならず彼の左右には小さい従兄の娘たちも二人、彼に手をひかれたまま、時々取つてつけたようにちよつとお下げさの頭を下げたりしていた。……

それからもう何年かたつた、ある寒さの厳しい夜、僕は従兄の家の茶の間まに近頃始めた薄荷はっかパイプを啣くわえ、従姉と差し向いに話していた。初しよなのか七日を越した家の中は気味の悪いほどの静かだった。従兄の白木しらきの位牌いはいの前には燈とうしん、心が一本火を澄とましていた。そのまた位牌を据えた机の前には娘たちが二人夜着よぎをかぶつてい

た。僕はめつきり年をとった従姉の顔を眺めながら、ふとあの僕を苦しめた一日の出来事を思い出した。しかし僕の口に出したの
はこう云う当り前の言葉だけだった。

「薄荷はっかパイプを吸っていると、余計寒さも身にしみるようだね。」

「そうお、あたしも手足が冷ひえてね。」

従姉は余り気のないように長火鉢の炭などを直していた。……

：

(昭和二年六月四日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.ujiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

冬

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>